

## 「自分」の意味用法に関するレベル別の使用傾向分析：日本語読解教材とBCCWJの対照分析を中心に

靳，夢瑩  
九州大学大学院地球社会統合科学府

<https://doi.org/10.15017/4752552>

---

出版情報：地球社会統合科学. 28 (2), pp.37-47, 2022-01-31. 九州大学大学院地球社会統合科学府  
バージョン：  
権利関係：(c) 2022 JIN Mengying

# 「自分」の意味用法に関するレベル別の使用傾向分析 —日本語読解教材とBCCWJの対照分析を中心に<sup>1</sup>—

A semantic analysis of “jibun” in different levels of textbooks  
A comparative analysis of Japanese reading teaching materials and BCCWJ

キン ムエイ  
斬 夢瑩

## 要旨

The purpose of this study is to clarify the characteristics of the various usages of “jibun (self)” by using a corpus of Japanese reading teaching materials and the BCCWJ, a general-purpose corpus of written language of Japanese native speakers. Based on Kim (2013) and Takubo (1997), “jibun” can be divided into general usage, reflexive usage, the first-person pronoun usage, and the second-person pronoun usage. This paper makes a comparative analysis of the usage trend of “jibun” in the corpus of teaching materials of different levels and in the BCCWJ, and uses correspondence analysis to clarify the usage of “jibun” by using the register information in the BCCWJ.

The results show that the usage tendency of “jibun” between the corpus of teaching materials and the BCCWJ is different in the follow two ways. First, the rate of reflexive usage in the corpus of teaching materials is higher than that of the BCCWJ, but the rate of general usage in the BCCWJ is higher than that of reflexive usage in middle and advanced levels. Second, the usage rate of the second-person pronoun usage of “jibun” in the corpus of teaching materials is lower than that of the BCCWJ, and it seldom appears in teaching materials. Furthermore, based on the correspondence analysis, it was also found that “jibun” has the moderating and sympathetic pragmatic functions.

キーワード：日本語読解教材、「自分」、対応分析、教材改善

## 1. 研究背景

日本語の「自分」には複数の用法がある。再帰代名詞と使用される場合や自分自身を示す自称詞として使用される場合もある(この用法はかつて軍隊で広く用いられていたとされる(金 2013))。また、対称詞として使用される場合もある(田窪 1997)。しかし、日本語教育の文脈で「自分」の用法に着目する研究は少なく、多くの学習者は「自分」の各用法の使い分けを十分に意識できておらず、コミュニケーションに支障のある誤用も観察される。したがって、「自分」の用法を理解し、発話場面に応じて適切に使用することは学習者にとって重要な課題である。

教材や教科書は外国人学習者が最も系統的に日本語を学ぶ手段の1つであるが、多数の用法を持つ「自分」についての網羅的な説明は少なく、主に名詞として取り扱われるため、その用法を十分に把握することが困難である。特に、学習レベルに応じてどのように「自分」の用法を学べばよいかという点については解明されていない。

くわえて、発話場面に応じて適切な「自分」の使用傾向を解明するためには、日本語母語話者の使用傾向を明らかにする必要がある。教材は学習者の学習目標等から体系的に編成されたものであるが、母語話者の「自分」の使用実態を完全に反映しているわけではない。したがって、日本語母語話者の「自分」についての使用実態を解明し、教材での使用傾向の相違点を明らかにすることは、教材改善を目指すために必要であると考えられる。

そこで、本研究では自作の『レベル別日本語読解教材コーパス』(以下、教材コーパスと略記)における「自分」のレベル別の使用状況を明らかにし、日本語読解教材で「自分」の使用傾向を明らかにする。また、母語話者の使用実態を明らかにするために日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)でレジスター別に「自分」の各用法の使用傾向を調査する。

以下、2節で「自分」の定義及び用法に関する先行研究を概観し、3節では研究手法及び研究用データを紹介する。4節で結果と考察を示し、5節で前節の考察を踏まえて全体のまとめ及び教材改善への方向性、今後の課題について述べる。

## 2. 先行研究

### 2-1. 「自分」の定義及び用法

「自分」の定義について広く認められている定説がないため、以下では日本で広く使用される2つの辞書、『新明解国語辞典』(第5版)と『大辞林』(第3版)を用いて「自分」の定義を述べる。『新明解国語辞典』(第5版)は日本で最も広く使われている国語辞典の1つである。また、『大辞林』(第3版)は「自分」への語釈が詳細である。本稿では、議論の出発点として、上記の2つの辞書の定義を使用する。

『新明解国語辞典』(第5版)より

- ① 行動したり、何かを感じたりする、当のその人。「自分だけいい子になる。」
- ② (代)話し手自身を指す言葉。旧軍隊で多く用いられた。

『大辞林』(第3版)より

- ① 反照代名詞。話し手・聞き手・第三者のいずれにも用いる。その人自身。「自分で行くしかないと思った。」
- ② 一人称。多く男性が改まった時に用いる。わたくし。「自分の責任であります。」
- ③ 関西を中心に二人称で使われることがある。「自分が言うたやないか。」

上記の定義から、「自分」の用法は再帰代名詞用法や一人称代名詞用法、二人称用法等があることがわかる。田窪(1997)は「自分」の用法について、再帰代名詞用法、対称詞用法、自称詞用法を3つに分け、分析しており、この分類を裏付ける論拠である。

- ① 「自分」は普通、主語を先行詞としてとる再帰代名詞とされる。  
(例) 田中は山田に自分の妹の写真を見せた。
- ② 対称詞の用法(関西地域で一部使われる)  
(例) 自分が困るぞ。
- ③ 自称詞の用法(中国地方や軍隊用法として使われる)  
(例) 自分がやります。

### 2-2. 「自分」の境遇性

田窪(1997)は状況によって同じ語を使用しても異なる人を指すことが可能であると述べている。田窪によると、「私」「おれ」「おいら」の類、「あなた」「君」「おまえ」の類は、話し手自身、聞き手を直接に指すのを本務とする表現であるため、話し手によって指すものが変わることがある。

(1)

甲:私も馬鹿でした。

乙:そうです。私も馬鹿でした。

(田窪1997)

「私」は、甲の発話では、話し手である甲を指し、乙の発話では乙を指す。したがって、各々異なる指示対象を表している。

田窪は、話し手がどちらになるかという立場の違いを反映する性質を、境遇性があると定義する。上記の例のように、「私」は、話し手自身を固定的に指している。つまり、話し手甲は「私」で自身を指すことができ、聞き手乙は「私」で自身を指すことができるのである。

一方、(2)の父の発話と息子の発話はどちらも「お父さんが間違っていた」と述べているが、「お父さん」は発話によって指すものが変わっていない。したがって、「お父さん」には境遇性がないと言える(田窪1997)。

(2)

父親:次郎、お父さんが間違っていたよ。  
息子:そうだ。お父さんが間違ってたんだ。

(田窪 1997)

「自分」も境遇性を持つため、様々な対象を指すことができる。金田一(1988)は一人称・二人称を分析し、同一語であっても他の人称へ交替することがあると述べている。また、(3)のように、再帰代名詞を二人称へ転用する場合がある。したがって、「自分」は再帰代名詞としても人称詞としても使用されると言える。

(3) 自分(は)、どんなん?

(金田一 1988)

「自分」が持つこのような境遇性は、学習を困難にする要素の1つであると言える。

### 2-3. 「自分」に関する研究

廣瀬・加賀(1997:12)は日英語の比較を通じて、視点の面から人称詞を対照分析した。廣瀬・加賀は「英語の人称代名詞は話し手の公的自己を表す“I”を中心とした体系をなしているのに対し、日本語は公的自己自体を表す固有の言葉がない。その代わりに日本語には、話し手の私的自己を表す固有の言葉として「自分」という表現がある」と述べている。

友田(2006)は典型的な「自分」の用法と本来の意味を明らかにした。友田は100個以上の例文を収集し、「自分」の用法を検討した。その結果、例文の8割ほどは先行詞を持たない「自分」で、照応的な「自分」に比べてはるかに数が多いと指摘し、以下のような「自分」の用法が典型的な用法であると主張する。

① 先行詞を持たず、話者を指す

② 内省的である

そして、間接表現である「自分」と直接表現である「私」の使用できるケースの異同について、例を挙げながら説明した。

(4)

私は鏡の中の自分を眺めた。  
自分は鏡の中の私を眺めた。

(友田 2006)

友田は、「私」がより直接的であるのに対して、「自分」は間接的、客観的、そして内省的な響きを持つと指摘している。さらに、話し手自身を客観的に眺めていたり、状況を一般論のようにとらえていたりすると、「自分」が好まれるようだと述べている。

以上見てきた通り、「自分」の構造面及び用法面に関する蓄積が多い一方、「自分」の習得に関する研究はほとんどない。複数の用法を持ち、かつ境遇性を有している「自分」は教材でどのように扱われているかは明らかにされていない。そこで、以下では教材の各レベルにおいて「自分」の使用実態を明らかにし、日本語均衡コーパスでの「自分」使用実態と対照研究を行い、「自分」の取り扱い方について教材改善につながるような提言をすることを目指す。

## 3. 研究データと研究手法

### 3-1. 研究データ

#### 3-1-1. 教材コーパスの概要

本研究で使用する教材として、日本国内で広く使用され、レベル情報を変数に持つ読解教材を研究対象にする。現代の「自分」の使用実態を明確に捉えるために、2010年以降発売された教科書を中心に取り扱い、文章以外の詩や短歌等、特殊で、日常的ではない文体は研究対象から除外する。

表1は教材コーパスの語数情報である。教材は全21冊であり、初中級7冊、中級6冊、中上級5冊、上級3冊から成り立っている。各レベルの文章数はそれぞれ初中級167件、中級54件、中上級215件、上級60件である。

表1 教材コーパス概要

教材レベル	初中級	中級	中上級	上級	総計
延べ語数(単位:語)	94,707語	110,414語	130,011語	54,715語	389,847語

### 3-1-2. 日本語均衡コーパス

日本語均衡コーパスとして、2011年に国立国語研究所が公開した『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)を使用する。その理由として、BCCWJは「現代日本語書き言葉の全体像を把握する」ことを目的として編纂された1億430万語のコーパスで、書籍全般・教科書・韻文・法律等、13ジャンル<sup>2</sup>から取られたものであり、日本語母語話者の使用実態を代表していると考えられるからである。教材コーパスとBCCWJをうまく組み合わせることで、現代日本語における「自分」の使用傾向を体系的に研究することが可能になる。

### 3-2. 研究手法

まず、金(2013)と田窪(1997)に基づき、各用例を用法ごとに分類する。

1. 再帰代名詞用法(以下「再帰用法」):(省略を含めて)何らかの先行詞を持つ用法  
(例) 本田は自分の子供をホンダに入社させなかった。(中上級)
2. 非照応用法—汎指用法(以下「汎指用法」):特定の人物、事物を指示するのではなく、科目一般、人間一般のように、広範囲の人物また物を指示する。  
(例) 大切な場面は自分の心に刻んでください。(中上級)
3. 非照応用法—自称詞用法(以下「自称詞用法」):  
(例) 今、自分は、人生の大切な岐路に立たされると思う。(上級)
4. 非照応用法—対称詞用法(以下「対称詞用法」):  
(例) 自分はどう思うの。(廣瀬・加賀1997:19)

品詞情報等を利用した詳細な分析が可能になるよう、教材コーパスをレベル別に形態素解析と品詞タグ付けを行い、「自分」を含む文をレベル別に抽出し、レベル別の用例集を作成した。また、金(2013)と田窪(1997)の「自分」の用法分類に基づき、全ての例文から「自分」の用法を識別した。

また、BCCWJからランダムに「自分」を含む用例を抽出した。ただし、コーパスサイズが異なるため、BCCWJからは「自分」を含む用例の0.6%をランダムで抽出することとした。抽出された用例について、教材コーパスと同一の基準で用法を分類し、レジスターごとに集計した。

### 3-3. 対応分析

対応分析はフランスのベンゼグリによって1960年代に提唱され、1970年代から普及し始めた解析方法で、コレスポネンス分析とも呼ばれる(金2007)。対応分析は、視覚的な出力が可能なることから、変数間の関係性を見出す言語研究において広く用いられる研究手法である。近接したラベルの間の関連性が強く、各象限の周辺に配置されるほど特徴があると言える。

対応分析を用いることで、レベルとレジスターの2つの変数の関連性を2次元で表現し、変数間の関係を視覚的に明確に捉えることができると考えられる。本研究では、BCCWJの用例を「自分」の用法別とレジスター別に分類してクロス集計表を作成し、これに対して対応分析を実施した(詳細は4-3.を参照)。

## 4. 結果と考察

### 4-1. 『レベル別日本語読解教材コーパス』の各レベルの「自分」の使用状況

表2は全語数に対する「自分」のレベル別使用頻度から算出した使用率の結果を示している。図1は表2の傾向を視覚

「自分」の意味用法に関するレベル別の使用傾向分析 一日本語読解教材とBCCWJの対照分析を中心に—  
的に把握するために棒グラフにしたものである。

表2 「自分」のレベル別用法ごとの使用率(%)

	初中級	中級	中上級	上級
汎指	0.037	0.015	0.087	0.053
再帰	0.092	0.094	0.105	0.060
自称	0.011	0.013	0.012	0.020
対称	0.000	0.001	0.000	0.000
計	0.139	0.123	0.203	0.133

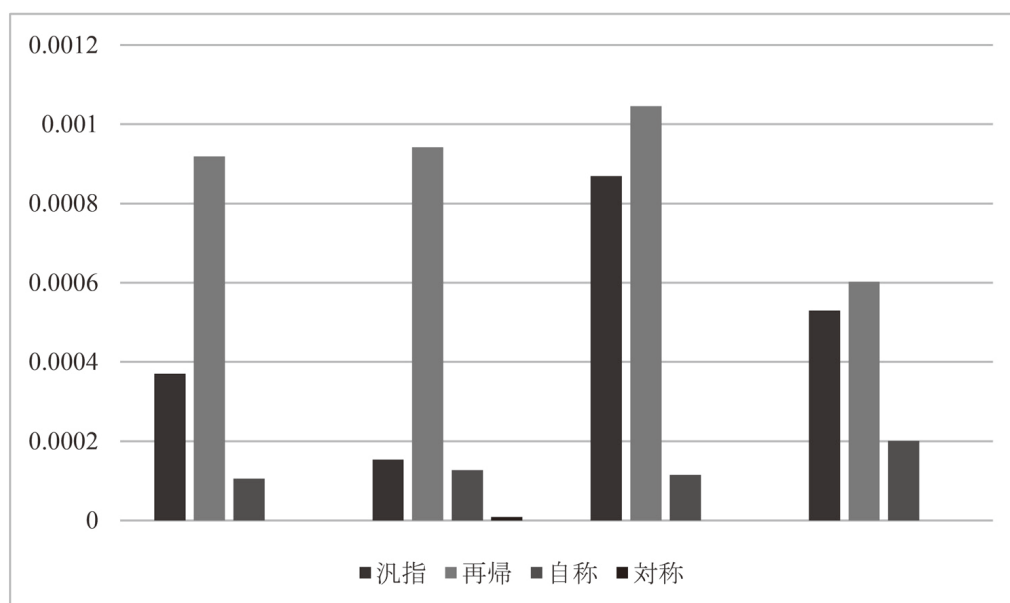


図1 「自分」のレベル別用法ごとの使用率

表2が示しているように、教材コーパスでは初中級、中級、上級での「自分」の使用率の平均値は0.132%である。中上級での「自分」の使用率が0.203%と最も高い。どのレベルでも「再帰用法」の使用率が最も高く、「汎指用法」の使用率が高い。使用率が最も低いのは「対称詞用法」であり、中級にのみ出現し、割合は0.01%である。この用法は西日本でよく使われる方言用法であるため、読解教材に使用されることは少ないのであろう。

図1を見ると、初中級と中級では「再帰用法」の使用率の平均値は0.093%で、これに対して中上級では「再帰用法」が占める使用率が最も高く、0.105%である。「自称詞用法」の使用率はどのレベルでも「再帰用法」と「汎指用法」の使用率より低い。上級では「自称詞用法」の使用率が最も高く、0.02%を占めている。

また、中上級と上級での「再帰用法」の使用率と「汎指用法」の使用率の差は中上級と中級での「再帰用法」の使用率と「汎指用法」の使用率の差より小さいことが分かる。これは、文章のジャンルが影響を与えたと推測できる。初中級と中級では「再帰用法」と「汎指用法」の間の差が大きいですが、中上級と上級ではこの差が小さくなる。これも同様にジャンルが関係すると考えられる。初中級と中級では物語等、単純な事象の描写が中心となる文章が多く、分かりやすく、結束性が高いこと等が特徴である。その一方、中上級と上級になると説明文のような、より複雑で抽象的な文章や、批判的思考を要求する意見文が増え、それにふさわしい文体が導入される。これに伴って「汎指用法」が多く使用されるようになる一方で、「再帰用法」の使用が減少していると推測できる。



4-2. 教材コーパスとBCCWJでの「自分」の使用状況の対照分析

表3に用法別に集計した結果を示す。また、教材コーパスとBCCWJとの対照を図2に示す。

表3 教材コーパスとBCCWJとの対照

	再帰用法	汎指用法	自称詞用法	対称詞用法
教材コーパス	360 (59.50%)	194 (32.07%)	50 (8.26%)	1 (0.17%)
BCCWJ	349 (58.17%)	164 (27.33%)	80 (13.33%)	7 (1.17%)

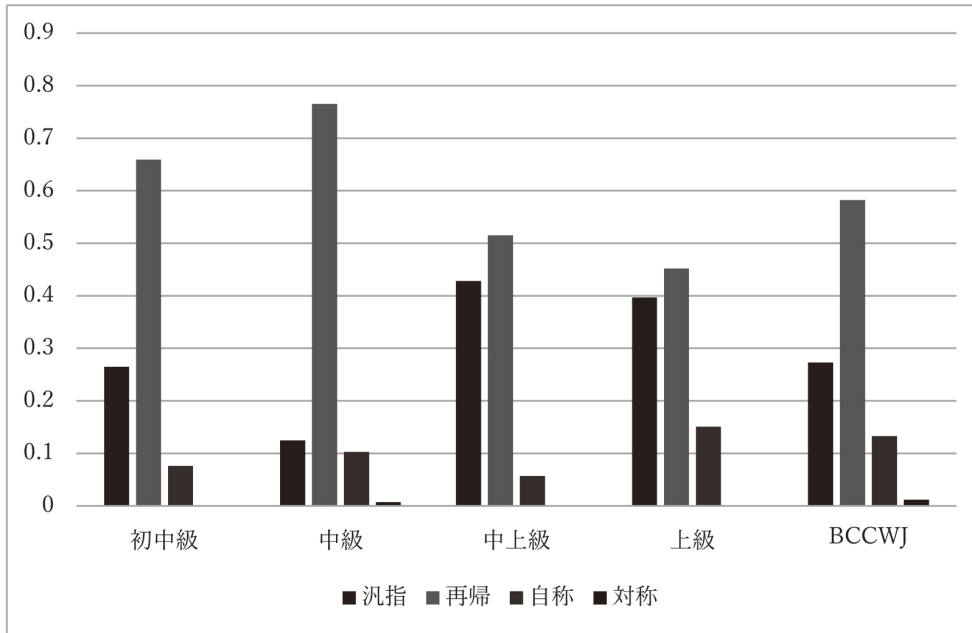


図2 教材コーパスとBCCWJとの使用率の対照

表3が示すように、BCCWJと教材コーパスで使用された「再帰用法」はほぼ同じ比率を占めている。「汎指用法」は教材コーパスでの使用率が高い。「自称詞用法」と「対称詞用法」はBCCWJで占める比率を上回っている。

図2は「自分」の用法をレベル別にBCCWJと対照した結果である。教材コーパスでは、初中級と中級での「汎指用法」の使用率がBCCWJでの「汎指用法」の使用率より低いが、中上級、上級での「汎指用法」の使用率はBCCWJでの「汎指用法」の使用率より高い。「再帰用法」は「汎指用法」と正反対の結果となっており、教材コーパスでは初中級、中級での「再帰用法」の使用率がBCCWJでの「再帰用法」の使用率より高いが、中上級と上級での「再帰用法」の使用率はBCCWJでの「再帰用法」の使用率より低い。

教材コーパスの初中級、中級、中上級での「自称詞用法」の使用率はBCCWJの「自称詞用法」の使用率より低いが、上級レベルでの「自称詞用法」の使用率はBCCWJの「自称詞用法」の使用率より高い。このほか、BCCWJでは「対称詞用法」の使用率が比較的高い。教材コーパスでは1例しか使用されていないが、BCCWJでは7例が観察された。

この結果から、初中級と中級では「再帰用法」、中上級と上級では「汎指用法」が多用されていることが窺える。初中級、中級、中上級教材での「自称詞用法」の使用率が低いことから、初中級、中級と中上級では学習者に「自称詞用法」への注意を促すべきであると言える。BCCWJでの「対称詞用法」の使用率は教材コーパスより若干高かったため、母語話者の発話では教材コーパスより「対称詞用法」が比較的多く使用されていることが分かった。「対称詞用法」も、(特に上級の)学習者に明示し、学習させたほうがよい用法であると考えられる。

### 4-3. BCCWJのレジスター別「自分」の使用特徴

レジスター別に各用法の使用率の結果を表4に示す。また、集計結果を対応分析したものを図3に示す。対応分析には、統計ソフトR(ver.4.0.3)を用い、CAパッケージのca関数を使用した。

表4 レジスター別「自分」の使用率

	再帰	自称	対称	汎指
出版・書籍	0.281	0.163	0.143	0.354
図書館・書籍	0.461	0.388	0.571	0.311
特定目的・ブログ	0.060	0.075	0.143	0.104
特定目的・ベストセラー	0.095	0.025	0.000	0.043
特定目的・教科書	0.003	0.000	0.000	0.012
特定目的・広報紙	0.003	0.000	0.000	0.018
特定目的・国会会議録	0.006	0.013	0.000	0.000
特定目的・知恵袋	0.083	0.338	0.143	0.152
特定目的・白書	0.009	0.000	0.000	0.006

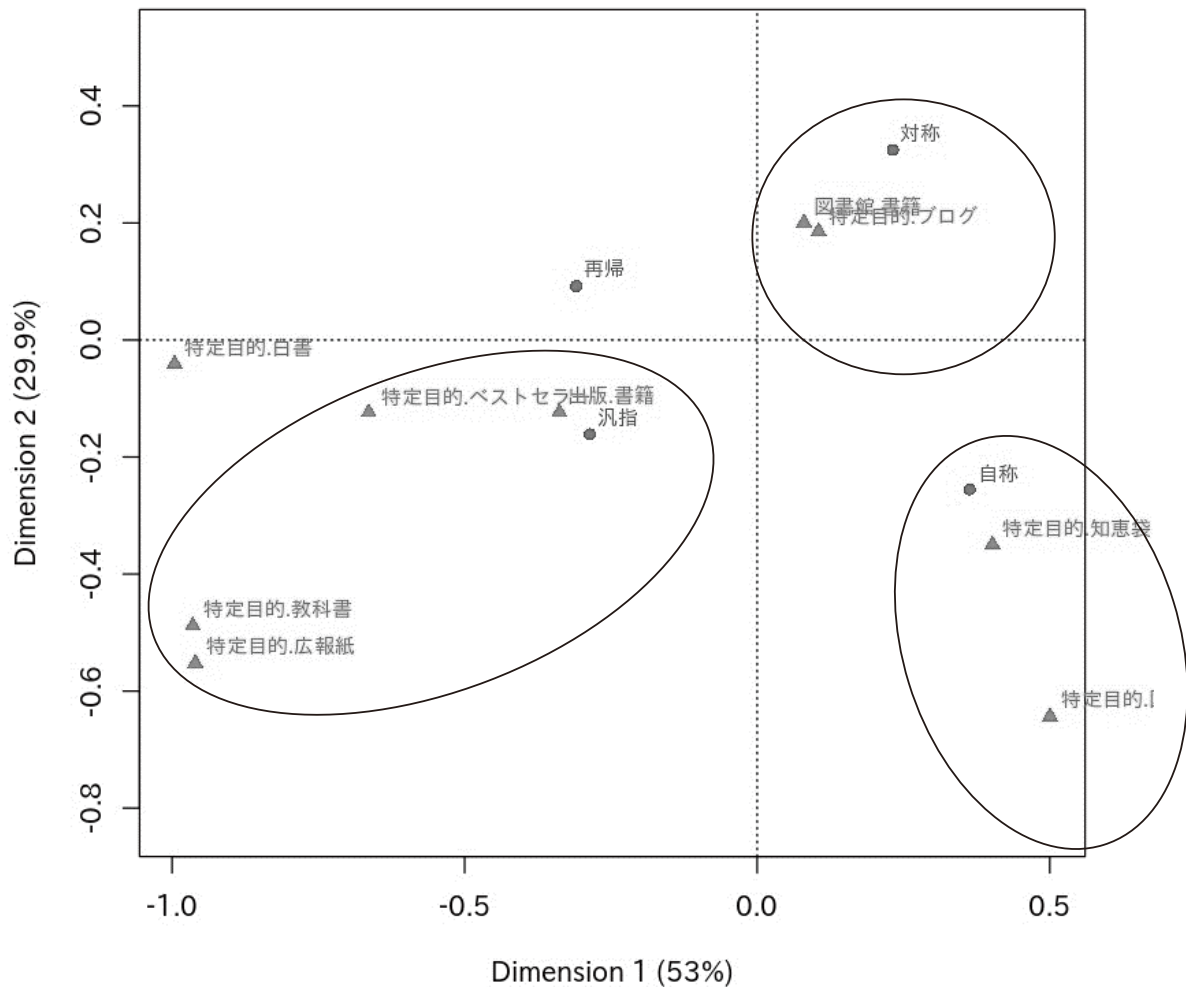


図3 レジスター別対応分析した結果



表4のレジスター別「自分」の使用率から分かるように、全ての用法は主に出版・書籍、図書館・書籍、特定目的・ブログ、特定目的・知恵袋の4レジスターでの使用率が高い。

いずれの用法も書籍での使用頻度が著しく高いが、「再帰用法」、「自称詞用法」と「対称詞用法」は図書館・書籍での使用率が高く、46.1%、38.8%と57.1%を占めている。「汎指用法」は出版・書籍での使用率が最も高く、35.4%を占める。「自称詞用法」と「対称詞用法」は出版・書籍での使用率が相対的に低く、全体の15%前後を占める一方、「再帰用法」と「汎指用法」は使用率が高く、28.1%と35.4%である。さらに、特定目的・知恵袋で「再帰用法」、「対称詞用法」、「汎指用法」の使用頻度は12%前後であるが、「自称詞用法」は33.8%に達している。

図3は、BCCWJの各レジスターと「自分」の4用法のクロス集計表に対して対応分析を行った結果である。なお、図中の楕円は、それぞれのレベルの大まかな範囲を示すために筆者が付加したものである。まず、全体的な分布から見ると、4つの用法は異なった象限に配置されていることから、用法上の使用差異が高く、共通の特徴が少ないことが分かる。そして、横軸の寄与率は53%で、この軸によって「対称詞用法」、「自称詞用法」が使用されたレジスターと「再帰用法」、「汎指用法」が使用されたレジスターが大きく分かれ、差異が顕著であることが見られる。

次に、「対称詞用法」と近接する共起レジスターを見ると、図書館・書籍、特定目的・ブログ等がある。「自分」の対称詞用法は関西地域で頻繁に使用されるので、日常会話を反映する小説等の書籍、ブログ等での使用が多いと考えられる。さらに、「汎指用法」の使用範囲が広いことがわかる。「汎指用法」は近接するレジスターが多く、特定目的・ベストセラー、出版・書籍、特定目的・教科書、特定目的・広報等が見られる。

最後に、「自称詞用法」について考察する。「自称詞用法」と近接するレジスターは特定目的・知恵袋、特定目的・国会会議録である。国会会議録は会議の経過や結果を記録した文書である(石倉 1984)。知恵袋と国会会議録ではともに自分の主張や意見を述べられることが多い。異なる点は、知恵袋で発表した内容は、ウェブ上のコミュニケーションであるため、国会会議録より不特定多数の目に触れることを想定されやすいということである。このことから、聞き手の人数が多い場合には話し手が自分の主張を述べる時に「自分」を好んで使用するという傾向がわかる。

以上のことから、「汎指用法」は日本語母語話者が広範囲に使用する用法であるため、「自分」の最も頻繁に使用される「再帰用法」が定着した後に「汎指用法」導入すれば、日本語の意味をより一層適切に理解することが期待される。なお、「自分」の「対称詞用法」は関西地域で頻繁に使用されている。例えば、日常会話を反映した小説等の書籍、ブログから取り出した「対称詞用法」の用例を用いて「自分」の「対称詞用法」への理解を深めていくことが学習者にとって効果的であると考えられる。

#### 4-4. 知恵袋での「自分」の用例分析

以下では、知恵袋で使用された自称詞用法の「自分」の用例を抽出し、「自分」の用例から使用の特徴を分析する。用例は質問者と回答者に分けて分析する。本研究では質問を提出する人を質問者、質問に対して回答する人を回答者と定義する。

広瀬・加賀(1997:56)は、視点的用法の「自分」について以下の原則に従うと述べている。

##### 「客体的自己の投影の原則」

観察者としての話し手は、自分が観察している状況の主体に自分の客体的自己を投影することができる。したがって、状況の主体を指すのに「自分」が用いられると、その「自分」は話し手が状況の主体に投影した客体的自己を表す。

以下では、「客体的自己の投影の原則」を用いて、例文を見ながら具体的に分析する。

(5)-(7)は、質問に対して回答者が自分の意見を述べる際に、「自分」を自称詞として使用する例である。

##### (5)

目を洗うなら、保存料の入っていない目薬(ヒアレイン等)が一番。第一、本当に目にいいなら、とっくの昔に眼科でも使ってるよ!と、自分のかかりつけの眼科医はおっしゃってました。

(BCCWJ)

例(5)では、目薬に関する質問について、話者は「私」を使わず、「自分」を自称詞として用いて回答した。例文中の「自

分」は現時点の回答者を指すのではなく、「眼科に行った経験があった自分」を客体として捉えたものである。回答者は、「眼科に行った経験があった自分」を自己の主体から切り離し、観察者として自己の経験を話す。この回答には、あくまでも参考として役に立てばという気持ちがあるが、主張が強くなるのを防ぐために、「自分」を使い、意志の緩和を目指したと考えられる。

(6)

自分は男ですが、現段階では別姓は反対です。誤解しないで欲しいのですが、既婚女性全てが男側の姓にしる等という意味で別姓反対を考えているわけではありません。

(BCCWJ)

(6)では、回答者が夫婦別姓の質問に対して自分の考えを述べている。回答者の考えであるが、「私」や「僕」を使わず、「自分」を一人称として使用している。回答者は「別姓に反対する自分」を自己の主体から切り離し、自己の主張を記述するのでなく、現時点の客体としての自己の主張を述べていると考えられる。「私」や「僕」を用いると、時間と無関係に、いつでも回答者が「別姓に反対する」と感じられるため、「自分」を用いて、「別姓に反対する」は不変の主張ではなく、一時的な主張であると表したいのであろう。

(7)

将来、もしかしたらまた仕事に付くこともあるかもしれませんが、一度は仕事を経験しておいた方がいいと思います。子供に仕事の事を聞かれた時、自分が仕事を経験しているのとしていないのとでは大分違ってくると思いますし。

(BCCWJ)

(7)は、就職するかあるいは就職をやめ結婚するかについての質問に対する答えである。回答者は、「自分」を用いて質問者の視点で考慮していることを表しているように思われる。「きみ」等のような二人称代名詞等も使用することができるが、その場合、完全な傍観者の立場で質問を考えていると感じられる可能性がある。質問者と無関係であることが感じられ、冷たい言い方になるのを防ぐために、「自分」を用いて、回答者が質問者の立場で考えていると伝える意図が窺える。

以下の(8)-(9)は質問者が「自分」を自称詞として使用する例である：

(8)

会社にいるときは結構愛想笑いばかりで、それは周りには気づかれてないと思います。完全に演じている自分はいやなのだけど、演じないととても冷たい素の自分をさらけだすのが怖いです。病院へ行って薬を処方してもらったほうがいいのでしょうか？

(BCCWJ)

(8)は、質問者はストレスがたまっている自分の様子を描述し、改善法があるかを尋ねる文である。今は質問している「自分」から仕事中の「自分」が持つ心理表現を描出し、改善法や意見を求めている。ストレスがたまっている冷たい自分を別人として描出し、いつもの「自分」と異なり、何かの原因があるために変化した「自分」であることを表す意図が感じられる。

(9)

結婚して一年です。家を建てたり仕事をしていたので、この一年は自分たちの意思で子供を作りませんでした。しかし義母や義兄の嫁から、「どうして子供ができないのか？」等とうるさく言われています。

(BCCWJ)

(9)は質問者と義母との付き合い方についての質問である。質問者は結婚して一年間は忙しかったため、子供をつくらなかった等の自分自身の状況について紹介し、自称詞の代わりに「自分」を用いた。自称詞の使用を避けることによ

て自己の主張を緩和できる。つまり、妊娠しないのは忙しくて余裕がないから、自分は一生妊娠したくないわけではない。そして、「自分」を通じて義母と義兄の視点から「妊娠するつもりがない自分」を客体視していることができる。質問者自身がそう考えているのではなく、義母と義兄がそのように考えている。この手法の使用によってより客観的に自己の状況を説明することができるのである。

これらの例はいずれも「私」「きみ」のような人称詞に変更しても意味上の齟齬が生じないのに、「自分」を使用している。日本語の「私」はより直接的であるのに対して、「自分」は間接的、客観的あるいは共感を表現する役割があると考えられる。

以上の用例から日本語の「自分」の性格を捉えることができよう。金田一(1998)は日本人が第一人称代名詞をあまり使用しないのは、日本では「私は」、「私が」をよく使用すると、自分のことを強く主張しているようで、相手に不快感を与える恐れがあるからだと言及している。したがって、話者が自身の考えを伝達する際に、「私」の代わりに「自分」をよく使用すれば、自己の意思や主張を緩和できると考えられる。

この結果から、学習者が自分自身の主張を婉曲的に伝達する際に、「私」の使用の代わりに、「自分」を使用することが適切な場合があり、これはコミュニケーションの上で有効な情報であると言えるだろう。

## 5. まとめと今後の課題

本研究では、先行研究に基づき「自分」の用法を分類し、自作した『レベル別日本語読解教材コーパス』におけるレベル別「自分」の使用傾向、教材コーパスとBCCWJとの「自分」使用の相違点、及びBCCWJのレジスター別「自分」の使用傾向を考察してきた。

その結果、教材コーパスにおける「自分」の使用傾向とBCCWJとの異同については、教材コーパスではBCCWJより初中級と中級で「再帰用法」の使用率が高く、中上級と上級で「汎指用法」の使用率が高いこと、教材コーパスでは「対称詞用法」の使用率が極めて低いこと等が明らかになった。また、BCCWJでの「自分」の用法をレジスター別に分析した結果、「汎指用法」の使用範囲が広いこと、「対称詞用法」は図書館・書籍、特定目的・ブログ等のレジスターと近接していること、「自称詞用法」は知恵袋と国会会議録レジスターと近接していることが分かった。最後に、知恵袋から抽出した用例を挙げながら、「自分」は意見の緩和を意図すること、あるいは共感を表現することができるかと結論づけた。本研究での成果を用いることで、このような母語話者らしい「自分」の使用傾向を提案し、教材であまり言及していない用法に注意を促すことも可能である。

今回は主に「自分」を用い対照分析をしたが、日本語では、「自分」以外にも状況によって用法が変化する人称詞が「きみ」、「かれ」等のように多数存在する。これらの教材での扱われ方についての研究も少ないため、使用傾向と用法の解明が必要であろう。

## 注

<sup>1</sup> この研究は英語コーパス学会語彙研究会と日本語教育学会秋季大会で発表したものを統合し、加筆・修正したものである。

<sup>2</sup> BCCWJでは、レジスターと呼んでいる。具体的には、出版・書籍、出版・雑誌、出版・新聞、図書館・書籍、特定目的・白書、特定目的・教科書、特定目的・広報紙、特定目的・ベストセラー、特定目的・Yahoo!知恵袋、特定目的・Yahoo!ブログ、特定目的・韻文、特定目的・法律、特定目的・国会会議録がある。

<sup>3</sup> 「特定目的-知恵袋」レジスターのデータは情報共有サービスである「Yahoo!知恵袋」(以下、「知恵袋」と略記)から抽出したものである。疑問に思っていることを匿名で質問し、知っている事柄について回答でき、知恵と知識を参加者同士で共有できるサイトで、2004年4月からヤフー株式会社が提供している日本最大の知識検索サービスである。本研究での知恵袋とは、質問を入力することと、答えが返すことができるウェブサイトを指す。

## 参考文献

### 日本語文献

- 石倉賢一 (1984)「国会会議録について」『大学図書館研究』25: 39-44.
- 金雪花 (2013)「自称詞用法の『自分』の許容度を上げる要因―『主語・主題』に位置する『自分』について―」『一橋大学国際教育センター紀要』4: 75-86.
- 金田一春彦 (1988)『日本語新版』下, 岩波書店.
- 金明哲 (2007)『Rによるデータサイエンス データ解析の基礎から最新手法まで』森北出版株式会社.
- 田窪行則 (1997)『視点と言語行動』くろしお出版.
- 友田英津子 (2006)「日本語再帰代名詞『自分』の用法について」『国際経営・文化研究』11 (1): 101-107.
- 広瀬幸生・加賀信広 (1997)『指示と照応と否定』, 研究社.

### 英語文献

- Sten-Erik Clausen (1998) *Applied Correspondence Analysis: An Introduction*. Saga Publications, Inc. (藤本一男 (訳))
- (2015)『対応分析入門原理から応用まで―解説 Rで検算しながら理解する』オーム社)

### 辞書

- 『新明解国語辞典』(第5版) 1997三省堂.
- 『大辞林』(第3版) 2006三省堂.

### 参考サイト

- MeCab 公式ページ, 閲覧日:2020年12月16日, <https://taku910.github.io/mecab/>
- BCCWJ 公式ページ, 閲覧日:2020年10月24日, [https://pj.ninjal.ac.jp/corpus\\_center/bccwj/](https://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/)
- 情報学研究データリポジトリ-「Yahoo!知恵袋データ (第二版)」-データ概要, 閲覧日:2020年12月18日, [https://www.nii.ac.jp/dsc/idr/yahoo/chiebkr2/Y\\_chiebukuro.html](https://www.nii.ac.jp/dsc/idr/yahoo/chiebkr2/Y_chiebukuro.html)